

環境省 中央環境審議会 水環境・土壌農薬部会 水環境制度小委員会

良好な水環境の創出に向けて

—環境社会学の立場から—

法政大学
准教授
野田岳仁

<https://nodakehito.com/>

名水百選選定から40年—いまなにが起きているか

昭和の名水百選（1985年）秋田県美郷町六郷地区



水場は存続していても、「価値」の存続には至っていない¹

(野田 2018)

名水百選選定から40年—いまなにが起きているか

平成の名水百選（2008年）長野県松本市の源智の井戸



水場の管理組織は高齢化により解散
利用者は拡大、管理の担い手は縮小 (野田 2023a)

良好な水環境＝水場の「価値」継承

昭和の名水百選・長崎県島原市「浜の川湧水」では**管理の担い手が増加**

昭和45年



平成3年



令和6年



名水百選に選定された水場の「価値」とは？

島原市（旧有明町）の“井戸端”

野菜を洗いながら、洗濯をしながら**四方山話**をしたり、**情報交換**したり、たまには**嫁やしゅうとめの悪口**のはけ場所でもありましたが、若い嫁さんは先輩のお母さん方から、**子育て**や、**近所づきあい**のしかた、**家事**にいたるまで、**大事な生活の知恵**を学びました。これが**井戸端会議**です。

（有明町教育委員会編 1997）

水場の「価値」＝“井戸端”

- ① 水汲み・台所・洗濯場 → 資源的価値
 - ② 子どもの遊び場
 - ③ 地域の社交場・憩いの場
 - ④ **生活の知恵を学ぶ場**
- 社会的価値

（野田 2023a ; 2024）

浜の川湧水では、「価値」を損なわない観光地化が進められた

「価値」が継承されれば、管理の担い手は拡張する

水場の「価値」継承による担い手の拡張

平成の名水百選（2008年）長野県松本市の鯛萬の井戸



鯛萬の井戸の掃除の担い手は3人→2人に減少。地元中学生が井戸に関心を持ち、2023年に鯛萬の井戸を舞台に地域の夏祭りを企画。祭りは好評で地域の恒例行事として定着。祭りをきっかけに地域住民の井戸への関心が高まり、月1回の清掃活動に新たな担い手が10人以上参加

若い世代の地域参加が、水場の「価値」の再認識を促す

水場の「価値」継承による地域再生

平成の名水百選選定・滋賀県高島市針江集落



見世物ではなかった台所「カバタ」 2004年集落NPOを設立し、カバタの見学ツアー実施



ピーク時年間1万人来訪 / 約1,000万円の売上 収益を集落の設備投資や環境保全活動に還元
→ 暮らしの充実・住民の満足度向上に寄与 / Uターン者増、戸数も微増 / 水源地域とも連携
2010年 文化庁重要文化的景観選定、2014年 第9回エコツーリズム大賞受賞 (野田 2013 ; 2014)

水場の「価値」継承が、住民のウェルビーイングにつながる

各地で活発化する名水づくり①

新潟県津南町見玉集落



昭和期より名水を活かした地域づくりに取り組み、2014年には集落水道の余剰水を企業に提供。その環境協力金を集落に還元し、自治会費の負担軽減（年6万→1.2万）、集落内のすべての道路に消雪パイプ整備を実施。過疎化が進む豪雪地域で、集落の持続性を支えている

名水づくりが、集落の持続性を支える

各地で活発化する名水づくり②

富山県氷見市上久津呂集落



農業用水路に国指定の天然記念物・絶滅危惧種イタセンバラが生息。地元住民の農業と暮らしの営みが、希少生物の生息環境を育んできた。この環境を活かしたアクアツーリズムが、水環境を「使いながら守る」実践となっている。

暮らしのなかで徹底的に「使うこと」が、「守ること」につながる

良好な水環境の創出に向けた評価の視点

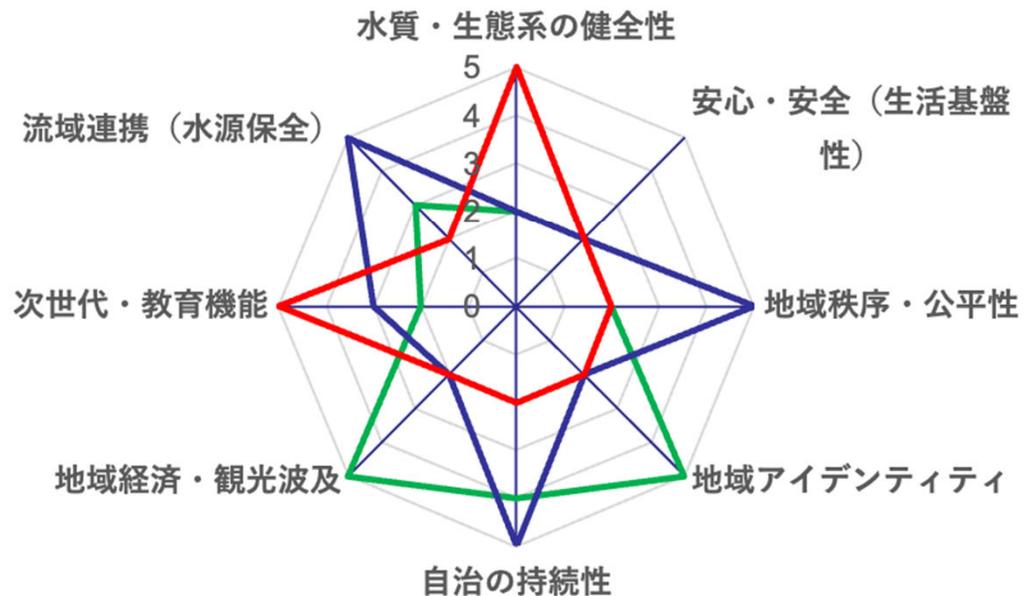
①空間軸

良好な水環境の創出は、住民、NPO、企業、行政など多様な担い手の関係性のなかで成立している。地域社会は多様であり、水環境に関して重視される価値は地域ごとに異なる。優劣ではなく、どの価値を重く置くかという重み付けとして地域特性を理解することが重要である

一律の基準では捉えきれず、地域の固有性と担い手（主体）の関係性を内包する評価枠組みが求められる
（その一案としてのレーダーチャート）

良好な水環境の創出に向けた評価の視点（仮）

— 針江集落 — 大毎集落 — 浜の川湧水



②時間軸

良好な水環境の創出は、短期間で完結するものではない。水環境の保全や利活用による地域住民のウェルビーイングの向上、関係人口・Uターン者の増加、観光振興といった地域社会の変化は、10年単位の時間を要する 경우가少なくない。事業は単年度評価が基本となるが、水環境を支える自治や担い手の育成、関係性の維持といった点については、中長期的視点からの検証が不可欠である。短期的成果とあわせて、5年・10年後の地域の姿を視野に入れた評価スパンの構想が求められる

文献

- 有明町教育委員会編（1997）『有明町の民俗』
- 野田岳仁（2013）「観光まちづくりのもたらす地域葛藤－『観光地ではない』と主張する滋賀県高島市針江集落の実践から」『村落社会研究ジャーナル』20（1）：11-22
- 野田岳仁（2014）「コミュニティビジネスにおける非経済的活動の意味－滋賀県高島市針江集落における水資源を利用した観光実践から」『環境社会学研究』20：117-132
- 野田岳仁（2018）「コモンズの排除性と開放性－秋田県六郷地区と富山県生地地区のアクアツーリズムへの対応から」鳥越皓之・足立重和・金菱清編『生活環境主義のコミュニティ分析－環境社会学のアプローチ』ミネルヴァ書房：25-43
- 野田岳仁（2023a）『井戸端からはじまる地域再生－暮らしから考える防災と観光』筑波書房, 小田切徳美監修
- 野田岳仁（2023b）「『むら』の自治支える小規模集落水道」『水の文化』75号：36-41
- 野田岳仁（2024）「暮らしに根づいた水場の『価値』存続の論理－名水百選『浜の川湧水』から考える生活と観光」『水の文化』77号：34-39